

「美しく魅せろ～車尾っ子、いざマット～」の実践を通して

鳥取県米子市立車尾小学校 西尾 友宏

1 はじめに

マット運動は、技を身につけたり新しい技に挑戦したりするときに、楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。また、連続した技ができるようになったり、より美しい動きができるようになったりすることで達成感や成就感を味わうことができる運動でもある。一方で、体の回転や倒立など、日常生活では通常行われない動きを含んだ運動を行うため、自分がどのように動いているのか、イメージ通りなのか、客観的に把握しづらい一面もあり、児童ができたつもりになってしまうこともある。そこで、グループでの教え合いや集団演技を取り入れることで、自分と他者を比較したり、他者に合わせようとしたりして、自らの課題をより明確に把握したり、より適した課題に取り組んだりできるのではないかと考え、グループマットを取り入れた実践を考えた。

2 研究の実際

(1) 単元計画の工夫

2学年 発表会計画の立案							
		1	2	3	4	5	6
主なねらい		学習の進め方を知ろう	いろいろな技ができるようになろう		技の完成度を高め、自由演技に挑戦しよう		発表会をしよう
学習内容 核となる	進め方、ねらい、できる技の確認	技のこつの理解 技の完成度を高める		つなぎ技の習得 技の組み合わせ方の工夫			
		【回転技】 着手・順次接触・伸膝 【倒立技】 着手・視線・足の振り上げ		【自由演技】 タイミングずらし 左右・前後に分かれて 交差			
	オリエンテーション	ドリル運動（感覚づくりの運動）					発表会をしよう
		いろいろな技に挑戦しよう					
		【回転技】 ・大きな前転(後転) ・開脚前転(後転) ・跳び前転 ・伸膝後転		【倒立技】 ・壁倒立 ・腕立て横跳び越し ・倒立前転 ・補助倒立			
		課題演技を極めよう		課題演技を極めよう			
				自由演技に挑戦しよう			
振り返り							

(2) グループ編成の工夫

グループマットを行うグループは、習熟度による編成を行った。共通の課題や、共通の発展技に取り組み、自分たちなりの達成感や向上心をもつことをねらって、基本的な技のできばえや、苦手意識などを参考にグループを組んだ。

(3) 言語活動の充実

- ① アドバイスカードに、図やイラストで技ごとのポイントをわかりやすく示し、技ごとのマットの近くに置き、児童が確認しながら練習を行えるようにする。
- ② ふり返り板を活用して、学習の「楽しさ」「できばえ」についてふり返る時間を設けた。前時と比べ、なぜその位置になったのか、グループ内で話し合うようにさせた。



(4) 情報機器（タブレット端末）の活用

自分の動きを客観的に把握したり、課題となる動きのポイントを焦点化・視覚化したりするためにタブレット端末を用いた。単元前半では、3～4人に1台を渡し、撮影も児童が行い、体の動き、向きなどを確認させた。単元後半ではグループに1台ずつ、グループマットの演技を定点からの撮影で録画をさせ、タイミングなどを確認させた。

メリット

- ・標準のカメラアプリでの録画・再生のみなので、ほとんどの児童が難なく使用できる。
- ・スライダーを使って、スロー再生やコマ送りのように再生させ、見たい部分をより焦点化して見られる。
- ・どの部分を撮影してほしいかを友だちに伝えることで、自分の課題や技のポイントを、より明確に考えることができる。
→話し合いのツールとして活用できる。
- ・撮影する向きや高さなどを考えることで、撮影する側にとっても技のポイントの理解につながる。

課題

- ・小グループで1人ずつ撮影する場合に比べて、グループマットを撮影した場合は、見るポイントを絞り切れず、ただ漫然と見てしまったり、自分だけを見てしまったりする。
- ・スローやコマ送りの再生は確かに、有効な支援ではあるが、直に見てアドバイスを求められた児童から、「速くてタブレットで撮らないとわからない。」という声が聞かれた。タブレット端末はあくまで支援の道具であり、直に見るのが本来であることを踏まえておく必要がある。
- ・映像の確認には、撮影の倍の時間がかかる。

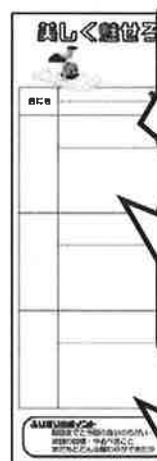
3 成果と課題

(1) 成果

- タブレット端末を児童が使用して撮影・確認を行う活動は、個人の技の習得の段階では、撮影する側・される側ともに、イメージを具体化させたり、技のポイントについて詳しく考えさせたりすることにおいて、効果的だった。
- 「わたしたちの体育」の図をもとにアドバイスカードを作っているの、ふり返りの時間やグループマットの練習時間に自分の「わたしたちの体育」でアドバイスカードの内容を確認することもできていた。児童は、自分の動きを知りたいときは映像を見ていたが、落ち着いて技のポイントについて考えたいときは、映像よりもアドバイスカードを見ており（動画よりも静止画）、「わたしたちの体育」の図解は、特にマット運動においてはとても効果的であった。
- グループで互いにできる技を話し合い、選択肢の中から技を組み合わせて演技を決めていったので、児童が自分の技の練習に必要感をもって、課題を焦点化させやすかったりした。

(2) 課題

- 習熟度別のグループ編成を試みたが、2段階の習熟度では、グループにあまり変化が見られず、ねらっていた効果が得られたとはいえなかった。単学級での授業編成にし、男女混合で6段階程度の習熟度にすればより明確な違いや効果が見られたかもしれない。
- 3分で撮影した映像を3分で確認することは大変難しく、なんとなく雰囲気を見ただけになってしまった。撮影時間の保障と、それ以上に映像を確認する時間の保障が必要である。さらに、グループの映像を見た場合、見るポイントがあまりに多く、また焦点化もされていないため、限られた時間で十分なふり返しを行うには、非常に負荷がある。結局自分だけを見てしまう場合が多く、「タイミングだけ」「方向がそろっているかだけ」など、見るポイントを細かく絞らなければいけないと感じた。
- タブレット端末への慣れと依存とを区別しなければならない。タブレット端末を用いる場合のメリットとデメリットを教師も児童も理解した上で、タブレット端末を使う活動（時間帯）、使わない活動（時間帯）とを明確に区切る必要があると感じた。

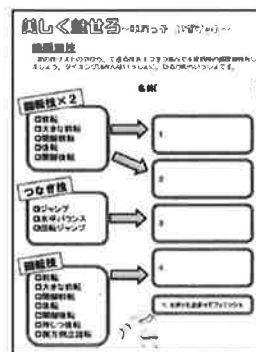


児童の感想

動画を見たら、技はうまくできていました。でも、みんなでそろってはいなかったので、次はきれいにそろうように練習したいです。

グループの中で、できる技、できない技を確認して、まだできない技をできるように練習した。開脚後転ができるようになった。

後転を一気にきれいに回れるようになった。友だちにアイパッドで撮ってもらって、跳び前転が少しできるようになってきた。



演技構成ワークシート